

漢魏の詩歌に示された 非情な文学感情

鈴木修次
(東京教育大学)

一

漢魏の詩歌、主として古詩、国歌をもって伝えられているところの読み人知らずの作品においては、時おり、以外に非情な文学感情に出あう。非情な文学感情ということばは、やや熟さないいかたであるかもしれないが、ここでは、良識的人情に対してさおさすところの、あるいは背をむけるところの文学感情、ないしは、良識への回帰を顧慮するところのな文学感情の意であると理解していただきたい。そうした作品の具体例は、以下の叙述においてしるすが、それらの例からうかがわれる文学感情の非情性は、詩経の作品群においては見られなかったもので、詩歌の世界においては、漢代の詩歌からにわかに顕著になるものを提言し、かつその現象の意味について、若干の考察を加えてみたい。

二

古詩十九首其四に、

人生寄一世 人の生の一世に寄する

奄忽若飄塵 奄忽なること 飄塵の若し

何不策高足 何ぞ高足(一駿馬)に策うちて
先拋要路津 先づ 要路の津に拋らざる
無為守窮賤 為す無かれ 窮賤を守り
轆軻長苦辛 轆軻して長く苦辛するを
とある。人のいのちは短い、それならば、駿馬にむちうつて、出世街道に抛ることをどうしてしないのか、貧乏を守つて、不遇な状態のままに長く苦勞するのはむだなことだ、というこの発言は、功利的な打算の感情を、ためらうことなくうたいだしているといえよう。古詩十九首其十一には、また次のようにうたう、

盛衰各有時 盛衰 各 時有り

立身苦不早 身を立つる 早からざるに苦しむ

人生非金石 人の生は 金石に非ざれば

豈能長寿考 豈に能く 長く寿考ならんや

奄忽随物化 奄忽として物に随ひて化す

榮名以為宝 榮名 以て宝と為さん

「榮名」ということばは、史記、遊俠伝の序に、「豈に若かん

— 9 — 漢魏の詩歌に示された非情な文学感情（鈴木）

や、論を卑くして俗に儕し、世と浮沈して、栄名を取らんに
 は」とあるのを思いうかべるならば、それは世俗的名声をさ
 すことになる。ただし「栄名」には、道德的名声にかたむく
 用例もある。吉川幸次郎教授は、「推移の悲哀」（下）でこの
 詩をとりあげられ、『この詩における栄名は、さきの「之
 身」が孝経から出る語であり觀念であるとすれば、より多く
 道德的な名声にかたむくであろうが』といわれているが（中
 国文学報第十四冊）、この古詩を意識して発言されているの
 であろう阮籍の詠懐詩其四一、「栄名は己が宝に非ず、声色の
 焉ぞ娛しむに足らん」のそれは、世俗的名声を意味している
 と考えられる。「栄名」、それをこそ宝としようという古詩
 十九首其十一の発言は、やはり相当ること、出世主義、榮達
 主義の感情を示しているように、わたくしには考えられる。
 要路の津に挽れ、栄名を宝としよう、ということばは、実
 は、人生ははかないがゆえに、つかのまのいのちを楽しもう
 という、無常感から発するデカダンスの傾向の流れにあるも
 のである。人のいのちは短いがゆえにこそ、「斗酒もて相娯
 楽し、聊か厚くするも薄くはせざれ」（古詩十九首其三）「如
 かず美酒を飲み、紉と素とを被服せんには」（古詩十九首其十
 三）「楽しみを為すは当に時に及ぶべし、何ぞ能く来たたる茲
 を待たん」（古詩十九首其十五）とする発言、あるいはまた、

人間楽未央 人間の楽しみ 未だ央まざるに
 忽然帰東嶽 忽然として 東嶽（泰山）に帰す

当須盪中情 当に須らく 中情を盪かし
 遊心咨所欲 心を遊ばせて 欲する所を咨れ
 （古辞、怨詩行）

命如鑿石見火 命は鑿石の火を見るが如し
 居世竟能幾時 世に居る 竟に能く幾時ぞ
 但當歛樂自娛 但だ當に歛樂して自ら娛しむ
 尽心極所嬉怡 心を尽くして 嬉怡する所を極むべし
 （古歌、滿歌行、趨）

の歌辞に示されたようなデカダンスの感情は、これまた漢魏
 の詩歌においてにわかには頭著になるものであるが、その現実
 主義的な享樂の気持が、一方においては、前記の功利的打算
 のことばにも走るのであると考えられる。それらのデカダン
 スなことば、さらに加えて功利的打算のことばは、きまじめ
 な生活観から考えるならば、だいたい非良識的な、いわば非情
 な文学感情である。しかしそれらは、後に考える如く、漢代の
 詩歌以後において特有の、新しい時代の新しい発言であった。

三

玉台新詠卷一に古詩と題して掲げる作品の中に、山で蕪蕪
 （香草、おんなかずら）を摘む女が、山より下りて昔の夫に
 出あい、新しく娶った女のことを男に尋ねる、それに対して
 男は、いくつかの観点から、「新人」と「故人」との比較を
 語るといふ趣向の五言詩がある。新しい妻と古い妻との比較
 は、下世話の興味の対象になりうる話しがらみであるといっ

ても、そうした発想は、おだやかな人情から考えるならばやはり非常識的で、それなりの非情さを感じる。この作品の結びは、「新人不如故」、やはりむかしのお前の方がよかったとするのであるが、作品の中心をなす部分は、新旧の女の比較をこころみるところにある。この作品は、芸文類聚に引くものはみな「古詩曰」に作り（巻三二、八一、八五）、太平御覧の引用もおおむねは「古詩」に作る（巻三八、八一四、九八三）が、しかし巻五二二の出婦に引く例は、「古樂府詩曰」とする。措辞から考えて、この作品はあるいは樂府、すなわち歌辞であったかと思われる。かりに詩であったにしても、それが樂府的趣向にあやかるものであることはたしかである。

太平御覧巻六八九・衣、および巻九〇七・兔に引く「古豔歌」に、「衣不如新、人不如故」①という句があり、建安の詩人である徐幹の「室思詩」には、「重新而忘故、君子所尤譏」といい、曹植の「浮萍篇」には、「新人雖可愛、不若故人歎」という。こうしたことばには、いずれも良識への回帰がみられ、それは前記古詩の結句「新人不如故」に共通する考え方なのであるが、しかしそうしたことばが改めて提示されることの中には、漢魏の文学において、一方には新しい女への興味が、開放的に展開されていたことを想像させる。詩経の作品においては、棄婦の情を棄婦の立場で訴えるもの、たとえば衛風「氓」や小雅「谷風」のような作品はあっても、新しい妻をもとの妻と比較してうんぬんするような趣

向のものは、求めることができない。友情を題材にするものにおいても、非情な文学感情を示すものが、漢魏の詩歌の中にはある。

昔我同門友 昔の我が同門の友は

高挙振六翮 高く挙がりて六翮を振ふ

不念携手好 手を携へたる好を念はずして

棄我如遺跡 我を棄つること遺き跡の如し

（古詩十九首其七）

親交在門 親交門に在り

飢不及食 飢うるも食に及ばず

（古辭、善哉行）

右の作品は、共に友情の裏ざりをうたうものである。善哉行古辭のうらには、あるいは、そうした事情をやむをえなくさせるある社会情勢の存在が考えられるかもしれない。初学記巻十八、貧に引く「魏武謡俗詞」というのは、魏の武帝、すなわち曹操の作になる「謡俗詞（辭）」の意であるか、あるいは曹操の時代の謡俗の詞の意であるか不明であるが（張溥の漢魏六朝百三家集は、魏武帝集の中にこの作品を収めている。ただし、馮惟訥、丁福保は共に未収載）、そこにうたわれている友情の關係は、好意を示そうにも、こちらが貧乏でそれも出来ないことをのべる。善哉行古辭にいうところは、あるいはそれに近いかもしれない。

甕中無斗儲 甕の中には 斗の儲無く

發篋無尺縑 篋を發くに 尺の縑無し
 友來從我貸 友の來りて 我に從きて貸るも
 不知所以 應ずる所以を知らず

（魏武詠俗詞）

芸文類聚卷八二、葵において「古詩」として引かれている次の作品は、太平御覽卷九七九、葵においては、「古歌辭」として引用されているものであるが、友情に対して冷酷なすめをしているがごとくに読める。

採葵莫傷根 葵を採るに 根を傷ふ莫かれ
 傷根葵不生 根を傷へば 葵は生ぜず
 結友莫羞貧 友を結ぶに 貧を羞むる莫かれ
 羞貧友不成 貧を羞むれば 友は成らず

（太平御覽は二つの「友」字とともに「交」字に作る）

太平御覽卷四〇六・叙交友に「古歌辭曰」として引くものは、「採葵莫傷根、結交莫羞貧、傷根葵不生、羞貧交不成」に作り、第二句と第四句とをいれかえる。葵が、この場合どういう連想作用を期待してとりあげられているのかははっきりしないが、詩經、幽風「七月」に、「七月 葵と菘とを亨る」とあり、説文にも「葵は菜なり」とあるように、古代中国においては野菜としても用いられていた。「採葵」とあるので、野菜としての草つみの歌に、想をおこしたものかと思う。②「羞貧」の羞は、いうまでもなく「はづ」とも読めるのであるが、この作品に

においては、葵をつむのに根をいためないように、交友においても根をいためない方がよい、それがためには、貧乏人は友人として進献するな、といっているように思われる。もしそうであるならば、この作品は、貧乏人は友人にするなということをお告する非情な詩歌であるということになる。

非情な文学感情は、肉身との関係においても示される。太平御覽卷四〇六、叙交友に「古歌辭曰」として引く次の作品は、肉身の情愛に対して水をさしている。

結交在相知 交を結ばんには 相知に在り
 骨肉何必親 骨肉も 何ぞ必ずしも親ならん
 甘言無忠実 甘言には 忠実無し
 世薄多蘇秦 世薄れなば 蘇秦多し

榮達する以前の蘇秦が、兄弟や妻からまでも冷笑をもってあつかわれ、後年榮達をとげた後に、「此れ一人の身なり、富貴なれば則ち親戚もこれを畏懼し、貧賤なれば則ちこれを輕易す、況んや衆人をや」と痛歎したことは、史記の蘇秦列伝に示されているが、世の中が俗悪になり人情がうすれてくると、蘇秦のようなしうちにあう人が多くなるというこの作品の発言は、肉親の愛情、あるいはその紐帯に対する懷疑を示している。この場合は、他人の間からである「相知」の方が、むしろたよりになることをにおわせる。

肉身関係のできごとを、冷やかな眼で残酷なまでに描出する作品が古楽府にある。楽府詩集卷三八に収載されている

「婦病行」「孤兒行」が、それである。「婦病行」は永年病床にある「婦」が男（夫）にむかって、自分の死後に残される孤兒の面倒をたのむことをのべたあと、「乱曰」として、その「婦」がなくなったあとの男と孤兒のさまを、男の立場に主として焦点をあわせつつ、かなり冷酷に写している。この作品は乱の部分の方が長く、しかも乱以前の部分においてのべた話をさらに展開させる形において、乱がつらねられている。それは古楽府においても、やや特殊な形である。この場合、乱以前の部分は、いわば前奏曲的に孤兒の悲劇的ムードをかきたてるものであるらしく、歌の主要な部分はむしろ乱にあるようである。さて、婦の死後、男は孤兒を抱き、市場に出かけて孤兒のために食餌を買ひ求めようとする。しかし、食物を買うべき銭もない。かろうじて友人に出あつて、銭を乞う。銭を与えた友人は、男とつれだって男の家へゆくが、孤兒の、母を求めて泣き叫ぶ姿に、ただただ当惑をする。そのあとに結んでいう、「行くゆく復た爾らんのみ、棄置して復た道ふこと勿からん」。この「行復爾耳」とは、乱以前の部分において臨終の婦が「行当折揺、思復念之」と嘆いたそのことばを受けついでいっているであろう。「折揺」は折天であるう、と黄節の漢魏楽府風箋、余冠英の楽府詩選にともないう。死んでいった婦が予想したように、この子の寿命も長いことばあるまい、そして「棄置勿復道」というきついなことばであることばで、この一篇の感傷をたちきる。この「棄置勿

復道」は、曹丕、雜詩二首其二の「棄置勿復陳」、また曹植、雜詩六首其二の「去去莫復道」あるいは同じく曹植、贈白馬王彪詩其六の「棄置莫復陳」などと同じ技法の句で、それは感傷をきびしくたちきって自己の現実にもどるときに使用される漢魏詩の常套的句である。

「孤兒行」は、兄嫂のもとに養われてみじめなめにあつてゐる孤兒のさまを写し、終りには瓜の収穫時に瓜をつんだ車をくつがえし、うちしおれるさまをのべ、「乱曰」として、

里中一何饒饒 里中の一に何ぞ饒饒たる

願欲寄尺書 願はくは 尺書を寄せ

將与地下父母 將て地下の父母に与へんと欲す

兄嫂難与久居 「兄嫂はともに久しくは居難し、」と。と結ぶ。この作品は、乱以前の歌辞において主要な叙述がつくされていて、「婦病行」の形とはちがう。この乱にいう「兄嫂難与久居」ということばは、そうした事態はさほど珍しいものではなかったであろうと考えられるものの、やはり非情なことばである。

孤兒の姿をひややかに写すということは、それ自体、詩歌の題材として非情なものであることを感ぜしめるが、さらに漢の楽府の中には、強盜あるいは辻斬りに出る男とその妻との場面を題材にしてうたおうとするものもある。宋書樂志において大曲であるとし、楽府詩集卷三七において相和歌瑟調曲の歌辞であるとして掲げている「東門行」がそれである。楽府詩集は、宋書樂志に掲げる歌辞を

一 13 一 漢魏の詩歌に示された非情な文学感情（鈴木）

「晋楽辞」とし、別に「本辞」というものを示している。この郭茂倩が示す本辞というのが、何に拠ったものであるか不明であるが、とりあえずはその「本辞」に従って、解説を進めてゆくことにする。この作品については、かつて拙稿において詳述したことがあるので、いまは簡略に従うが、一人の男が、生還を期待することもなく、東門を出てゆこうとする、といううたい出しに始まり、次にその男の家の状況をうつしていう、「盎たぐわの中には斗米の儲たくわ無く、架上を還視するに懸かれる衣無し。」この説明のしかたは、先に示した「魏武謡俗詞」に似ているところがある。家の中は、貧乏のどん底、そこで男は、剣を抜いて東門を出てゆこうとする。女たちは、衣を牽き、泣きながらそれをとめようとする。その部分、晋楽の辞とされるものは、本辞よりもはるかに委曲をつくしている。しかし男はききいれず、出かけてゆく。その終りの部分を、本辞にはいう、

咄行 行かん

吾去為遲 吾が去くこと 為に遅れたり

白髪時下難久居 白髪時に下らん 久しくは居とどまり難し

(本辞)

この、冷やかでむざんな本辞の結びに対して、晋楽の辞をもつて称せられるものは、次のように少しはやわらかくなってはいるが、しかし本人が強盗に出かけるというその筋がきを変えてはいない。

行 行かん

吾去為遲 吾が去くこと為に遅れたり

平慎行 望吾帰 平らかに行を慎しみ 吾が帰るを望め

(晋楽辞)

宋書樂志は「望吾帰」に作るのであるが、楽府詩集は「望君帰」に作る。そうであるならば「平慎行 望君帰」の二句は、女(妻)が男にむけていったことばとして理解しなければならぬ。楽府詩集のような形ならば、終りの部分の強烈さはさらにやわらげられるが、しかしこのうたが、強盗ないしは辻斬りに出かける男をその決意を挫折させることなしにうたうというその主題の方向は、いささかも変更させるところがない。これはまことに、題材からして非情なうたであるといわねばならない。

四

生命の問題に対しても、なげやりで乾いた感情をむき出しに示しているものがある。宋書樂志が「相和」の一として掲げるところの(楽府詩集の分類によれば、相和歌相和曲)「烏生」と題する作品がそれである。この「烏生」についてもかつて詳述したので、いまはかんたんな紹介にとどめるが、そこには死をめぐってのひややかな感情、乾いたすすんだ感情が展開されている。

秦氏の家の桂樹の間に巢を作って、八九匹の子がらすをはぐくんでいる親がらす、秦の家には射撃遊びが好きな「蕩子」がいて、睢陽の強弓、蘇合香をこめた弾丸をもって、その

からすたちをねらつてゐる。睢陽は、春秋時代の宋の地、蘇合とは、西域に産出する香の名である。この遊俠の徒は、他の漢魏の樂府作品においてとりあつかわれている遊俠の徒と同様、まことにはでなだて男である。この男は、ついにからすをねらいうちにして望みをはたす。死んだのは子からすであつた。子からすの死という劇的な場面を迎えて、常識的な詩歌であつたならば、当然ここで感傷に浸り、子からすの死を同情をこめてうたうであろうが、このうたの場合、感情に浸ろうとする気持はない。たちまち一転させて、運の悪いやつはどこにいても死ぬのだとうたう。この作品はハヤシことばとして「嗒我」ということばを頻用するが、「嗒我」はからすの哀鳴の擬声音でもあり、同時にうたいのハヤシことばでもあつたであろう。そのハヤシことばにも、冷酷なひやかしのひびきを感じる。

親がらすが子からすを生んだときは、南山の巖石の中にあつて、そこは人間たちもかよえない所であつた。しかし、上林の西苑に住む白鹿でも、獵師はそのほし肉を手にするし、天を高く飛ぶ黄鵠も、捕えられては後宮のさかなになり、洛水の深淵にいる鯉も、しばしば釣り針の犠牲になる。そして終りにいう、

人民生各各有寿命 人民の生各各寿命有り
 死生何須復道前後 死生何須ひん復た前後を道ふを

後漢の上林は、洛陽城の西にあつた。白鹿は、仙人の乗物と

して考えられていた。漢の嚴忌(前漢の文、景のころの人)の「哀時命」に「白鹿に騎りて容与す」とあり、漢魏の詩歌においては、古辞「王子喬」、古辞「長歌行」、曹操「氣出倡」に、仙人が白鹿に騎ることをしるしている。黄鵠と後宮とどういう因果関係をもつかは不明。「鳥生」のうたは、結びにおいていう、人のいのちにはそれぞれ寿命がある、死ぬ時期の早い晚いをとやかくいってみてもはじまらない。このうたから想像されるいのちに対する考え方は、意外にひやかであり、なげやりであり、そして乾燥している。

後漢の王符の潜夫論、浮修篇には、都市における商業の発達と、それにまつわる浮薄な風俗の流行にふれて、次のように記録する。

今、世を挙げて農桑を捨てて商賈に趨き、牛馬車輿は道路に填ち塞がり、遊手の巧をなす、都邑に充ち盈つ。本を治むる者少なく浮食する者衆し。「商邑翼翼として、四方にこれ極む。」(詩経、商頌、殷武のことば)今、洛陽を察るに、浮末なる者は農夫に什し、虚偽遊手なる者は浮末に什す。(云云)。或ひは遊遊博奕をもって事となし、或ひは丁夫世々鋤を傳けず、丸を懐にし弾を挟み、手を携へて遊遊し、或ひは好土を取りて丸を作り、これを弾に売るも、外はもって寇を禦ぐに足らず、内はもって鼠を禁ずるに足らず、(云云)。

右の記載はさらに続いて、富の偏在、傾斜した経済社会

が、世の風俗や世人の考えかたを、いちじるしく浮薄なものにして、世の風俗や世人の考えかたを、いちじるしく浮薄なものにして、蕩子の射撃遊びのさまは、王符の記述を裏づける材料として考えることも可能であろう。

五

漢魏の詩歌において、その文学感情、ないしはすでにその題材において、非情的性格を示すものの具体例をとりあげて、解説をすすめてきたのであるが、それならば、そうした文学感情ないしは題材は、それ以前の文学においてはなかったのであろうか。少なくとも、詩経、楚辞の範囲について考えるかぎり、そうした文学感情はまだ見られなかったといわなければならぬ。文学感情が、良識というわくからふみ出そうとするのは、詩歌においては、漢代から以後であるように思う。詩経について考えてみるに、人生ははかないものであるという歎きを示す作品を、すぐには思いつかない。有限な時間がどんどんすぎ去ってゆくなげきにややつらなるかと思われるものとして、かろうじて唐風「蟋蟀」、小雅「頍弁」が気がつくていどである。唐風「蟋蟀」の第一章にいう、

蟋蟀在堂 蟋蟀 堂に在り

歳聿其莫 歳は聿に 其れ莫れん

今我不楽 今 我 樂しまざれば

日月其除 日月は 其れ除ぎん

無已大康 已は大いに康しむこと無かれ

職思其居 職として 其の居を思へ

好楽無荒 楽を好むとも 荒む無かれ

良士瞿瞿 良士は 瞿瞿たり

三章から成るこの作品は、毎章とも押韻する部分の句（偶数句）を若干変えるのみで、あとは同じことばをくりかえしたう。歳も暮れる、今のうちに楽しんでおかなければ、月日はどんどんすぎ去るであろう、と一見無常感にもつらなるかに見える若干の焦燥感を写しつつも、そのあとすぐに続けて、しかし楽しんですぎるな、さんではいけない、できたおのことは、よく身を慎しむものだ、という良識への回帰のことばをもつて結んでいる。「今我不楽、日月其除」という句は、すぎ去る時間への焦燥をたしかに若干示してはいるが、それはしかし、漢魏の詩歌においてしばしば示されるところの、人生というものは一般的にいつてははかないものであるという無常感とは、同じではあるまい。無常への悲哀は、吉川教授もすでにしばしば言及されておられるごとく、詩経においてはほとんど示されていないといえる。無常への強い悲哀感がないがゆえに、デカダンスへの強い傾斜も、また詩経の作品には求めにくい。人生のはかなさをなげき、若干デカダンスのにおいをただよわせるかもしれないものとして思いつくかぶ小雅「頍弁」の末章の部分も、デカダンスなうたである、とふりかざしていることはためらわれる。

如彼雨雪 彼の雪ふるが如く

先集維箴 先づ集ぶは 維れ箴

死喪無日 死喪 日無し

無幾相見 相見ること 幾ばくも無けむ

楽酒今夕 酒を今夕に楽しみ

君子維宴 君子 維れ宴せん

その他、唐風「山有樞」の「且以喜楽、且以永日」（まあまあたのしみたのしんで、一日をのんびりくらそ）や、秦風「車鄰」の「今者不楽、逝者其蕪」（いまのとき 楽しまなければ そのうちに おいぼれる）ということばにしても、そこにはデカダンスのかけをみることはあまりできない。無常への感傷、ないしは悲哀へのなげきが強くないがために、そのことばには不健康な頹廢のかけがない。開放的にほがらかであり、かけりをもたずに陽気であるといえよう。かりにそこに若干の享楽の気持がうたわれているにしても、それらの享楽の感情は、良識の範囲の中にあり、たえず良識の世界に回帰しようとしている。

詩経の作品の中で、人間の終末感情をとりあげるかに思われるものには、大雅「雲漢」がある。それは、日照りのはげしいことをうたうものであるが、その末章に、

大命近止 大命は 止むに近きも

無棄爾成 爾が成を棄つる無かれ

という。この部分を説明する鄭玄の詩箋には、「今 衆民の命、將に死亡せんとするに近きも、勉めて我を助け、女の成

功を棄つる無かれ」といい、朱子は「今 死亡將に近づかんとすと雖も、もって其の前功を棄つべからず」というが、この二句は、終末の時を迎えようとする瞬間においても、なお人間の努力をすてるなということを戒しめている。それは、たとえ末期は近くとも、人間の希望を失うなとするものである。詩経に示された文学感情が、良識からふみはずすことをたえず警戒するものであることは、この二句からも端的にうかがえよう。

楚辞においてはどうかであろうか。楚辞においては、「離騷」においてさっそくに、次のような時間の推移をはかなむことばを見ることができぬ。

惟草木之零落兮 草木の零落するを惟ひ

恐美人之遲暮 美人の遲暮を恐る

またいう、

老冉冉其將至兮 老は 冉冉として其れ將に至らんとし

恐脩名之不立 脩名の立たざるを恐る

あるいはまたいう、

時續紛其變易兮 時は續紛として其れ變易す

又何可以淹留 又何ぞ 以て淹留すべけんや

右の「離騷」に示されたことばは、それぞれに、経過し去る時間に対するはげしい焦燥感を写し出している。そこに示された悲哀は、感傷というよりはむしろいらだちである。そのいらだちの叫びが、屈原という個性的な詩人の生き方の問題と

まつわって、「離騷」においてはくりかえし渦巻いている。しかしながら、移りゆく時間を愛惜する感情は、楚辞においてはむしろ一般的であったと考えなければならぬ。楚の古代の祭祀歌として考えられている九歌においても、たとえば「時は再びは得べからず」（湘君）あるいは「老は冉冉として既に極まらんとす」（大司命）などのことばを見る。湘君という「時」は、良時の意味で、一般的にいう時間の意味ではない。それは湘夫人にいう「時は驟には得べからず」というのと同意義であるが、良時はふたたびは得がたいということばの裏には、やはり短促な時間の推移を愛惜する感情がある。屈原の晩年の作であるともいわれ、また後人の作であるともされる九章にも、次の句が見られる。

歳忽忽其若頽兮 歳は忽忽として 其れ頽るるが若く
時亦冉冉而将至 時もまた 冉冉として将に至らんとす

（悲回風）

この場合の「時」は、老衰の時期の意味に理解するのがふつうのようであるが、一般的な時間の意味において理解してよいであろう。

宋玉の作とされている「九弁」、漢の賈誼の作かと疑われている「惜誓」にも、時の推移をはげしくいたむことばが示されているが、もはや例は省略する。

以上の諸事実から判断するに、楚辞の文学には、時間の推移に対するおののきが、ほとんど普遍的な形において示され

ているといえる。楚辞というスタイルの文学を生んだ南方楚の地帯においては、そうした悲哀感が一般的であったのではないかと思われる。屈原は、その普遍的に存在した悲哀の文学感情を、作者の個性を通過させて、さらにはげしくほとばしらせたのであるということができよう。そして「離騷」においてとくに燃焼させたその文学感情が、いわば楚辞的文学の典型となつて、「九弁」や「惜誓」、さらにはそれ以後の楚辞の系譜の文学に、継承されてゆくのであろう。

「離騷」において示された、時間の推移に対する悲哀感はげしい。しかし屈原は、悲哀におぼれて頽廢的になり、享樂的になることは、しようとはしない。その誠実な人間性は、痛歎しつつもたえず希望の方向への回帰をこいねがい、絶望しつつも誠実な努力を継続させようとする。したがって「離騷」は、そしてまたそれを一つの典型として継承する楚辞文学は、かりに絶望の方向にあるものであっても、良識を無視した放肆にして非常識的な文学感情を展開させる方向にはない。

六

人のいのちは一般的にはかないものであるという悲哀の感情は、漢代のことばにおいてははっきりと示される。中国の文学における無常への悲哀感の系譜を知るためには、さらに綿密な論証を必要とするのであるが、当面の問題は無常への悲哀感の系譜をたどることにはないので、その問題の詳述は他日にゆずるが、史記の留侯世家には「人生一世間、如白駒過

隙」ということばが示され、また魏豹彭越伝にも「人生一世間、如白駒過隙耳」ということばが見られる。これは明白に、人のいのちの無常なことを五言の句調においていうもので、古詩、古歌において示された「人生云云」の無常感を示すことばのいわばさきがけをなすものである。司馬遷当時、人命のはかなさを嘆く悲哀の感情を一つの成句としてのべる事実が、たしかに存在していたことを知る。そうした悲哀感をふまえて、デカダンスな方向の感情をあからさまに示すうたが、これまた前漢において示されている。それは、漢の武帝の子の広陵厲王胥の末期の作として、漢書の武五子伝に引かれている「歌」である。

厲王胥は、宣帝を呪詛したことが発覚して、その罪状調査のために宣帝からの使者がやって来、みずからの最後が近づいたことを察したとき、太子をはじめ子女や愛妾たちを集めてこの世の別れの宴を催し、次の句を含む訣別の「歌」をうたったという。

人生要死

人の生は要ず死す

何為苦心

何為れぞ心を苦ましむる

何用為楽心所喜

何を用て楽しみを為さん心の喜ぶ所を

こそ

出入無惊為楽亟

出入惊無かりき楽を為すこと亟にせん

いつかは死ぬべき人生であるならば、死がさし迫ったことをくよくよするにはあたらぬ、せめてはわずかな時間にお

いても、好むところのままに心を楽しませよう、というこの末期の「歌」の中には、あるデカダンスの感情をくみとることができる。漢代の詩において、デカダンスの感情をはっきりと示すものは、現存するものについて考える限り、この作品をもって始めとする。そしてそれは、中国の文学感情の展開の歴史の上においても、明確な位置を占めるであろう。

楊惲（？—前五四）がその友人の孫会宗に送った書翰の中の詩に、

田彼南山 彼の南山に田す

蕪穢不治 蕪穢にして治まらず

種一頃豆 一頃に豆を種うれば

落而為萁 落ちて萁と為る

人生行楽耳 人生は行楽のみ

須富貴何時 富貴を須つは何れの時ぞ

とある。詩は漢書の楊惲伝に引かれているが、この「人生行楽耳」の句には、デカダンスの感情がある。その詩に続けてみずからいう、「是の日や、衣を払ひて喜み、（云云）、誠に淫荒度無し、その可ならざるを知らざるなり（也）。「田彼南山、云云」の二句は、朝廷の荒乱のさまにたとえ、「種一頃豆、云云」の二句は、己が放逐されたことにたとえると漢書の顔師古注に引く張晏の説にいうが、この作品が失意の作である故に、さらに上四句にそうした寓意があるならば、末二句のデカダンスな感情は、疑う余地のないもの

— 19 — 漢魏の詩歌に示された非情な文学感情（鈴木）

となる。

下って後漢になると、靈帝の光和元年（一七八）に郡の上計に挙げられたと後漢書の本伝にしろされてある趙耄の、「疾邪詩」と一般に称せられている作品（後漢書本伝引）の中に、

文籍雖滿腹 文籍 腹に滿つと雖も

不如一囊錢 一囊の錢に如かず

という。このことばは、知識人の發言としてはまことにあからさまであり、かつ非情である。趙耄は、そろそろ建安の文人たちの活動の時期に近くなり、古詩、古歌の時代ともほぼ時を同じくすると考えられるが、後漢も末期に近づくと、發言はあからさまになる。そうした發言がなされるようになって背景には、先に掲げた王符の説のように、商業資本の急激な拡大ということなども少なからずあずかっているのかも知れないが、知識人にしてこの發言は、注意をひく。詩品において鍾嶸は評している、「斯こゝろの人にして、斯こゝろの困くるしみ有り、悲しいかな。」

建安の文学時代において、非情な文学感情をむき出しに示すものは、曹丕の上留田行である。

居世一何不同 上留田 世すまに居ふ一に何ぞ同じからざる

上留田

富人食稻与梁 上留田 富める人は稻と梁とを食らひ

上留田

貧子食糟与糠 上留田 貧子は糟と糠とを食らふ 上留田

田

貧賤亦何傷 上留田 貧賤また何ぞ傷いたまん 上留田

祿命懸在蒼天 上留田 祿命は懸りて蒼天に在り 上留田

田

今爾歎息 將欲誰怨 今爾歎息するも將いまた誰をか怨ま

上留田 んとする 上留田

（芸文類聚卷四一、論案引）

富める者と貧しき者との間に示されたいちじろしい不公平、しかし「祿命」は天にあるのであって、くよくよ怨んだところで誰をも怨みようがないではないか、とうたうこの歌の感情は、「烏生」の「人民生各各有寿命、死生何須復道前後」と共通するものがある。「祿命」ということばは、王充（一三七—一九二）の論衡、命義篇に、「人に命有り、祿有り、（云云）命とは、貧富貴賤なり、祿とは盛衰興廢なり」とあり、後漢の末期社会における種の流行語であったかもしれないと思われる。曹丕の上留田行は、上留田行をもってうたわれていた他の民謡にあやかって作られたもので、^⑤いわば遊びの作品である。したがってその作品がもつ思想性や文学性を、あまり深刻にとりあげてうんぬんすることはできないであろうが、帝王の作品にしてなおそうしたなげやりな非情の人情のうたがあることが注意される。当時、そうした乾いた感情のうた、しかしまた一面ではさばさばしたうたが、一般

的に人気があったものかと考えられる。

建安から正始にかけての詩人の作品においては、知識人の発言としては非常識にも思われるような、次のような詩が、求められる。

長短有常会 長短 常会有り

遅速不得辞 遅速 辞するを得ず

斗酒多為楽 斗酒もて多く楽しみを為さん

無為待來茲 為す無かれ 來茲を待つを

(応璩、百一詩、芸文類聚卷三四、諷引)

且以樂今日 且よらく以て今日を樂しまん

其後非所知 其の後は 知る所に非ず

(何晏、詩、初学記卷二七、萍引)

応璩の発言は、たとえば古詩十九首其十五などにすでに示されているものと同類であって、その考え方自体は特にめずらしいものではないが、ただそれが署名を有する知識人の詩の中に堂々と示されていることが、注意される。

七

以上の考察によって、署名を有する詩歌において、漢代以後、デカダンスな感情の作品や良識を無視するような文学感情の作品があらわれることが明らかとなった。そのことは、中国文学においてそうした人間感情の展開は、漢代あたりから始まるということを想像させる。しかしそれについては、あるいは次のような反論もあるかもしれない。なるほど詩経の作

品から、現象的には良識への回帰を無視したような作品は求められないかもしれない。が、だからといって、詩経当時、そうした文学感情がなかったとはいいきれないのではないか、詩経の作品は、良識という範囲においてセレクトされたもののみが、今日に残されているのであるから——と。その反論は、たしかに考えるべきものを含んでいる。しかし漢より前の時代の作品においては、かりに現存するものがある傾向に支配されたかもしれないことを考慮においても、人間の良識からはみ出す文学感情を示す詩歌が現に求めがたいことは事実である。それは、そうした文学感情が当時の人間の興味の対象にならなかつたことを、やはり示すとせねばなるまい。

漢代から、良識をふみはずす文学感情が顕著に示されるといふその現象については、どのように理解したらよいであろうか。わたしはそれを、人間の文学感情の、より自由な方向への展開であると考えたい。いわばそれ以前において、人は、文学感情が良識のわくをふみはずすこともありうることを、考えつかなくたものではなかつたか。しばしば乾いた、またすさんだ、また享樂的な文学感情が、大胆に開陳されるその背景には、そうした発言を必然的に将来せしめる社会生活の変化や、商業の發達ということも当然考えなければならぬであろう。しかし実は、この現象は、ある種の社会現象が、ある種の畸形な文学を生み出したというそれだけの単純なものではなく、より直接には、人間の文学感情が、それ自

— 21 — 漢魏の詩歌に示された非情な文学感情（鈴木）

体の展開の方向として、より自由にしてしばしばは放埒な發言を求めようになつたからではないか、とわたしは考えるのである。そして、世にいういわゆる建安文学が、そうした人間感情の、自由な發言への解放の時代に形成されていることも、みのがすことはできないであろう。建安の文人たちの詩歌においては、曹丕の上留田行に示されたような浅くしてドライな感情の作品は、あまり求められず、またデカダンスな感情をむき出しに示そうとするものもあまりはないが（その意味で建安の文人の詩歌は一面において健康的なものである）、しかしたとえば建安時代の作品として玉台新詠の序に説かれている情死をあつかつた五言の長篇「焦仲卿妻」などの存在は、当時の文学感情の自由にして発洩なエネルギーの存在を、作品において示すものであるといえよう。情死をとりあつかう詩歌は、この作品をもって始めとする。

〔注〕

① 公主に向ふることになつた後漢の竇玄に対して、前の妻が与えた書翰というのが芸文類聚卷三〇、別下に載せられているが、その中にも「衣不厭新、人不厭故」という句がある。

② 葵にはまた、きれいな花、秋霜の被害をいち早く受ける植物、という連想作用が、別にはある。詩経、陳風、東門之枌において、相手の女性の美しさをたたえて「視爾如藋」といつている。この藋は、荊葵と称する葵の一種であるこ

とを、陸璣の毛詩草木鳥獸虫魚疏においていつている。文選に引かれている古歌の「長歌行」にいう「青青園中葵」は、美しい花であり、秋霜に早くいためつけられる植物としてとりあげられている。それは芸文類聚卷八二、葵において掲げられている陸璣の「園葵詩」においても同様である。

③ 拙稿「建安詩を方向づけるもの」（昭和三三年、東京教育大学文学部紀要）

④ 拙稿「二世紀ごろの乾いた歌」（昭和三二年、漢文教室第三一號）

⑤ 楽府詩集の上留田行の解説を参照。文選卷二八、陸士衡、豫章行の李善注には、「古上留田行曰」として六言五句が引かれている。ただし六臣注本は、それを省く。

（本稿は、昭和三八年度日本中国学会において発表した内容に、補訂を加えたものです。同発表のあと、小尾教授から原稿をまとめることのおすすめをいただき、おことばに甘え、寄稿させていただきました。）